

研究テーマ

「教職員との関わりを通じた
コミュニケーション能力の育成」

1

本実践に関連する児童生徒の実態

対象児童 小学校第3学年

- 課題
 - ・教師に用件を伝えるときに大変緊張する。
(連絡ノートを届ける。職員室に鍵を取りに行く。
縦割り活動で担当の先生と話す。)
- 強み
 - ・明るく活発。(野球、お笑いが好き)
 - ・友達や親しい教師と楽しく会話ができる。
 - ・褒められると素直に受け入れ、意欲的に活動できる。
 - ・繰り返すことで見通しをもつことができる。

2

指導目標・指導仮説

教科等及び題材名
自立活動の時間「自分の言葉で伝えよう」

目標 (本実践終了時の期待する子供の姿)
作った料理を届けて、教師と話することができる。

指導仮説
教師とお話をすることで、教師と話することへの緊張が和らぐだろう。

児童生徒の実態

3

指導・評価の計画

◆表1 指導・評価の計画

	主な学習活動	目標	評価方法
1次	コミュニケーションの課題に気付き、学習計画を立てる。	・緊張せずに教師と会話をするために必要な活動を考え、学習計画を立てることができる。	・行動観察 ・チェックシート
2次	お話ををする。	・いろいろな教師と会話をする。	・振り返りシート
3次	料理を届けて会話をし、振り返る。	・作り方や食べた感想などについて楽しく会話をする。	・行動観察 ・チェックシート

◆表2 実践前後の変容の評価

評価内容	評価方法
実践前後での、教師との会話の様子	チェックシート、写真

4

指導の実際①

教師とお話会

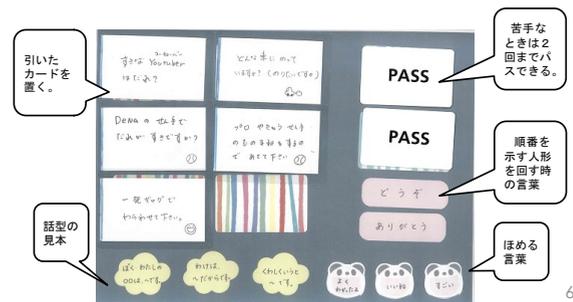


- ・話のテーマを書いたカードを順番に引いて会話を楽しんでいる。
- ・テーマは児童の興味関心に基づいて作成した。

5

指導の実際②

お話シート



6

指導の実際③

振り返りシート

自分のことばでつたえよう 名前()

初めて 先生と楽しく話をしよう。

😊 8人の先生と話を

振り返り

① よくできた
② できた
③ 振り返りできなかった
④ できなかった

😊

#リンクイン!!
けい 先生の話を
たのしみ
てい

- ・数字、顔の表情イラスト、文字の中から児童が選択できるシートを使って振り返りをした。
- ・文字での振り返りは苦手だが、進んで書いていた。

7

指導の実際④

会話チェックシート

(教師と緊張せずに会話ができるかを児童が数字で示したもの)

場所	実践前	実践後
特別支援学級	500	500
交流学級	100	120
他の学級	-1	50
縦割り活動	10	99
職員室	-1	0

- ・「0:とても緊張して話ができない、100:緊張せずに自分の伝えたいことを話すことができる。」を基準にしたところ、児童は1~500の数をあげて答えた。
- ・特別支援学級はかなりリラックス度が高いといえる。逆に、他の教室や職員室は-1でかなり緊張度が高いといえる。
- ・実践後は、担任以外の教師への緊張が和らぎリラックス度が上がった。

8

学習過程の評価

次	学習活動	児童生徒の状況	達成状況
1	コミュニケーションの課題に気付き学習計画を立てる。	料理を届けて職員室に行ったが入室できず、教師と話したいという気持ちを持つことができた。ロールプレイ、コミック法、会話の体験などの選択枝の中から自分に合った活動を選択することができた。	○
2	お話を会をする。	8人の教師と会話できた。	◎
3	料理を届けて、振り返る。	職員室、事務室、保健室へ行って料理を渡し、会話できた。	◎

9

実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> ・職員室入り口まで行くが、入室することも料理を渡すこともできなかった。 ・会話に関する自己評価「話ができる教師の数」(11/25人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・料理を持って職員室、事務室、保健室へ行って入室し、教師と会話をして渡すことができた。 ・会話に関する自己評価「話ができる教師の数」(20/25人)

10

指導仮説の検証

- 児童生徒は目標を達成したか。
 - ・十分達成した。
- 判断の理由・根拠
 - ・料理を教師に届けて、会話することができた。

- 指導の工夫は有効であったか
 - ・有効であった。
- 判断の理由・根拠
 - ・事前に教職員と連携し、学習のねらいや児童の実態を理解してもらった。さらに授業の中で、児童の会話に対する肯定的評価を意図的に行った。そのため、実践後の会話に関する自己評価が上がった。

11

指導の改善案

成果(よかった点)	課題(改善が必要な点)
<ul style="list-style-type: none"> ・1次と3次で料理を届けるという同じ活動をするので、変容を自覚することができた。 ・教職員に児童の実態を伝え、児童に対して評価を行うことで、会話に関する自己評価が上がった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の数値や感想による主観的な評価であった。



成果・課題を踏まえた改善案

- ・動画で会話の様子を確認したり、会話した回数をシールで可視化するなどで多角的に評価できるようにする。
- ・職員室に鍵を取りに行ったり、他の教室に届け物をしたりするなど、実際に教師と関わる活動を通して、会話に関する自己評価を高めていく。

12